

大阪文化財センター調査報告XXII

大和川環境整備事業柏原地区
高水敷整正工事に伴う
船橋遺跡試掘調査報告書Ⅱ

昭和51年10月

財団法人 大阪文化財センター



は し が き

財団法人 大阪文化財センター
理事長 加藤三之雄

船橋遺跡は、宝永3年(1706年)の大和川の流路つけかえによって、大和川の河床となり、水流は遺跡の上面を流し、しだいに遺物包含層を浸食していった。その結果、縄文時代から奈良時代に至る各時期の遺物が浸食崖や河原にみうけられ、古くより人々の注目するところであった。昭和31、32、33年には大阪府教育委員会によって発掘調査が実施され、その調査結果は「船橋」として上程され当遺跡の重要性を世上に知らしめている。

近年の開発工事の際、河川敷外にも遺物の出土が知られ、新発見がもたらされる一方、当センターの前回の調査において、従前に知られた遺物包含層が流出したことも確認されており、船橋遺跡に対する総合的対策を実施すべきことが痛感される。このたびの高水敷整正工事がその契機となることを願うものである。

昭和51年10月

例 言

- 1) 本冊子は財団法人大阪文化財センターが、建設省近畿地方建設局大和工事事務所の委託を受けて実施した大和川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴う柏原地区埋蔵文化財（船橋遺跡）範囲確認のための第2次試掘調査報告書である。
- 2) 調査に必要とした費用（¥ 2,220,000）はすべて建設省近畿地方建設局大和工事事務所が負担した。
- 3) 調査は財団法人大阪文化財センター業務課調査室が担当し、昭和51年8月18日から同年8月30まで現地調査を実施した。
- 4) 現地調査は調査室長、中西靖人の他辻内義浩、国兼和雄が担当し、木村宏史（大谷大学生）の協力を得た。遺物整理は当センター第2遺物整理室長、酒井龍一の他杉本朝美、畑暢子がこれに当たった。遺物の撮影は当センター写真室、片山彰一が行った。
- 5) 本冊子の執筆は第1・2・4章を辻内が、第3章を酒井が、出土遺物観察一覧表は杉本、畑が行った。
- 6) 発掘調査にあたっては、株式会社長谷川押井工務店の協力を得た。

目 次

はしがき

例 言

〔I〕 調査に至る経過	1
〔II〕 調査の結果	1
〔III〕 出土遺物	4
〔IV〕 まとめ	14

図版目次

図版一	船橋遺跡の位置と周辺の遺跡分布図
図版二	調査地区全景
図版三	第17トレンチ遺構
図版四	第17トレンチ遺物出土状態
図版五	第16・20トレンチ全景
図版六	出土遺物
図版七	出土遺物（第2トレンチ出土）
図版八	出土遺物
図版九	第17トレンチ平面・断面図
図版十	トレンチ地層断面図
図版十一	出土遺物実測図
図版十二	出土遺物実測図
図版十三	出土遺物実測図



挿図目次

第1図	トレンチ位置
-----	--------

第1章 調査に至る経過

建設省近畿地方建設局大和工事事務所が計画する大和川環境整備事業、柏原地区高水敷整正工事及びそれに伴う河川敷公園造成工事の計画地内に所在する船橋遺跡の試掘調査を同事務所の依頼により昭和50年10月に実施した経緯は「大阪文化財センター調査報告ⅩⅩ」に示したとおりである。

昭和50年の調査は船橋遺跡の現状確認を目的として実施したものであり、とくに遺物包含層の東一西の範囲の確定、遺物包含層の状況確認等を目的としたものであった。15ヶ所のトレンチを掘開したが遺物包含層の西限については、調査箇所西端のNo.14トレンチからもプライマリーな遺物包含層が検出されたので、「No.14トレンチよりさらに西にプライマリーな包含層が広がっている可能性が強く、今後、西限の範囲確認が必要」であろうと報告をなした。

この報告にもとづき建設省近畿地方建設局大和工事事務所より、大阪府教育委員会を經由して、大阪文化財センターに対し遺物包含層の西限を確定する調査の依頼があった。これにより当センターでは、第14トレンチより西方へ約300mの区域内に5m×5mのトレンチ6ヶ所を掘削する調査計画案を提示し、同事務所の同意を得た。その結果両者は受委託の契約をかわし、昭和51年8月18日より同31日まで現地調査を実施した。

第2章 調査の結果

今回の第2次調査の対象地は河内橋より西へ300mから600mまでの間の平坦な高水敷上である。トレンチは第1次調査と同様に堤防側と川（水路）側に片寄せた位置にそれぞれ3ヶ所、計6ヶ所のトレンチを掘開した。トレンチ番号は第1次調査時の番号を継承して、第16トレンチから第21トレンチと称した。

第16トレンチ

第16トレンチは第1次調査の最西端にあたる第13トレンチより西へ約50m、河内橋からは西へ約320mの地点に設定した。

地表下約 1.7m まで近、現代遺物を含む砂層で覆われている。砂層下には暗黄褐色土、次いで青灰色土層がある。この青灰色土層には直径約60cmのピットが切り込まれており、ピット中には弥生式土器と思われる粗製深鉢片が3片出土した。しかし遺物を包含する土が層として遺存しているか否かについてはきめ難いが、青灰色土上面が遺構の遺存する生活面として大誤ないであろう。なおこれらの土層は断面図(図版10)に示される如くトレンチ北側にのみ認められ、南側にはなく、おそらく水流によってえぐり去られたと思われる。

第17トレンチ

第16トレンチより南へ60m、第1次調査の第14トレンチより西へ約60mの川寄りの地点に設定した。この地点は平坦な高水敷が川の流路の方に向って傾斜し始める所にあたる。

地表下約1mが砂層である。砂層直下の黄褐色粘質土より、須恵器、土師器片等が検出されたが、瓦器椀片等も含むので、中世頃の層であり、遺構は認められなかった。整地層である可能性が強い。この層は地表面の傾斜とは反対に南から北に向って傾斜している。これは、この下層が整然とした堆積になっていないことからして、水流に削り去られたことによるものであろう。すなわち黄褐色粘質土を除去すると南側の高い部分では無遺物層である灰褐色粘質砂土、次いで多量の古墳時代遺物と若干の奈良時代遺物を含む青茶色粘質土が検出されるのに対して北西の低い部分では暗青色粘質土、暗茶褐色粘質土という層序である。更に北東の部分では、暗青色粘質土、暗茶褐色粘質土、黒褐色粘質土という層序である。いずれの層も土器を包蔵しており、黄褐色粘質土直下に奈良時代遺物を若干含む他はいずれも古墳時代初頭の土器である。遺構としては南側の高い部分で青茶色粘質土を除去すると、直径約3.3mの円形の落ち込みと、その円形落ち込みの東隅に巾約80cm、深さ約55cmの長円形の灰や焼土のつまったピットが検出された。青茶褐色粘質土の除去した同一平面で掘方が認められたので、同一の時期のものかと思われたが掘削の結果、焼土のあるピットは円形の落ち込みが埋った後に掘られたことが判明した。焼土や灰に混じって古墳時代初頭のいわゆる布留式の高杯の完形品や甕の破片が多数検出され

注意を引いた。円形の落ち込みはこれに伴う土器を確定し得ず、時期不明であるが、焼土のピットより、それ程時期をへだたらないものである。落ち込みの状態も不定形で、用途や機能は不明である。

トレンチの南側部分には存しなかった黒褐色粘土層も同じく布留式土器を包含し、約30cmの厚さを程している。この層を除去すると、青灰色粘質土が表われ、南側が高く、北側が低くなっており、何らかの遺構と思われるが判然としない。焼土のピットより時期的にはやや古いと思われるが、出土遺物は同一時期を示し、又前述の如く地層が整然と一様に重って堆積せず確定し得ない。

次いで青灰色粘質土を除去する際、この層中より弥生式土器中期の土器（図版12の3）、木器片が検出された。遺構は伴わない。

更に下層に遺物包含層の存否を確認するために地表下 2.5m まで掘削したが、遺物は検出されなかった。

第18トレンチ

第16トレンチより西へ 100m の、堤防寄りの地点に設定した。

地表下約 2.3m まで砂と礫の互層で覆われており、出土遺物はすべて水流に押し流され、砂層に混入したものである。この砂質下に青灰色粘土層の堆積することを確認したが、湧水多く砂層が崩れ、掘削を進め得なかった。しかし遺物を包含する可能性は少ない。

第19トレンチ

第17トレンチより西へ 100m の、川寄りの地点に設定した。

地表下約 2.6m まで掘削したが、すべて川砂の堆積層である。

第20トレンチ

第18トレンチより西へ 100m の、堤防寄りの地点に設定した。

地表下約 2m まで掘削したが、すべて川砂の堆積層である。

第21トレンチ

第19トレンチより西へ 100m の、川寄りの、周囲よりも約 6～70cm の段がつき低まった平坦地に設定した。

腐食土層が厚く約130cmあり、砂礫層はわずかに20cm程しか存しない。この砂

礫層下は暗緑褐色粘質砂土で、現大和川開通以前の堆積層と思われる。地表下約2.2mより黒色有機質土が認められたが、遺物は包蔵していない。

第3章 遺物

今回の調査で出土した遺物数量はビニール袋にして50杯余であり、全体としては比較的少数にとどまった。種類としては、弥生式土器・土師器、須恵器・埴輪・瓦・黒色土器・瓦器・羽釜・陶器・磁器・サヌカイト・軽石・木製品植物遺体等があり、昭和50年10月～昭和51年3月に実施された第1次試掘調査の結果とほぼ同様の構成をみせている。遺物の出土は、掘開された第16～第21トレンチのいずれからもあるが、原位置を比較的良好に保ち数的にもまとまっているのが第17トレンチである。その他のトレンチからは時期的にも混存した遺物の出土状況を呈している。

さて次に各トレンチ出土遺物の概要と類別を簡単に掲げる。

第16トレンチ

二次堆積層である流入砂層からは、弥生時代後～末期の壺片・古墳時代の須恵器・土師器片をはじめとして、それ以降の平瓦25・丸瓦・羽釜・瓦器・陶器磁器等の出土をみた。いずれも細片で原形をとどめるものはない。また暗青灰色砂質土層からは粗製深鉢片の出土をみているが、極細片の為時期判別は困難である。

第17トレンチ

流入砂層からは、弥生式土器(1)須恵器・土師器・瓦26・陶器片等の出土をみているが、土師器には杯・高杯(19, 20, 21)をはじめとして奈良時代にほぼ該当するものが多い。青茶褐色粘質土中には、弥生式土器片・布留式土器・瓦器枕片等の出土をみるが、時期的にも混存した遺物が含まれる。更に暗茶褐色粘質土中にはほぼ布留式土器片を主体とした破片が出土しているが、この上部分には須恵器や奈良時代の土器師片が含まれる。

最も多数の遺物が出土したのは、黒褐色粘質土層、及びピット中である。そ

の出土状況には若干の時期的前後関係が観察されるとは言え、それらの器形、あるいは製作技法等の諸点からいわゆる「布留式」土器群と理解される。器種としては甕・壺・高杯・埴等があり、比較的原形に近い出土状況をみせている。甕(6, 7, 8, 9)は、球形丸底の体部にくの字形に屈曲外反する口縁部を持ち、体部外面を刷毛調整、内面を篋削りし、口縁端部内側は胸厚である。これには、体部外面肩部に櫛による記号を刻されるもの(8)がみられる。壺には、球形体部よりくの字形に屈曲してそのまま斜上方へのびる口縁部のもの(10)と、途中で外觀に稜をつくり二段に外反する口縁部のもの(11)との二種が存在する。高杯は裾開きの脚台(15)に杯部をのせるか、杯部の形態からくいつかに分類され得る。数的に多いのは、ゆるやかに曲線をなして外開きするもの(13~17)で、この他平坦な底部より屈曲して斜上方へ大きく開らく口縁部を持つやや大型の高杯(18)が加わる。いずれも刷毛調整を施すが、とりわけ前者に細い横篋磨き状のナデ調整が施こされるものが多く、時期的な特徴である。埴(12)は、小型扁平球形の体部を持つが口縁部は欠損する。注目されるべきことの一つに、それら土器群の胎土はいずれも白褐色あるいは赤褐色を呈し、この地に特有な雲母粒は含まないことである。この地に於ける弥生式土器がおおむね黒褐色を呈し、顕著な雲母粒を多数含むことは極めて対照的状况である。またピット中には、桃核1個に加えて炭化木片・木塊・藁・粃といった植物遺体が遺存していた。

更に本トレンチ中からはこれら布留式土器群等に時代的に先行する弥生時代中期の土器がみられる。器種としては鉢・壺がある。鉢(3)は口径28.3cm、器高14.8cmを測り、一部が欠損するがほぼ全体を復元し得る。大きく開く下半部と直立する上半部という体部に短く屈曲外反する口縁部を持つ。装飾はないが、体部内外面は顕著な横篋磨きが施こされる。壺(2)は口縁部だけの破片だが、外彎する口頸部に下方へ拡張される口縁部端面を持つ。端面には櫛描き波状文が、端部内面には円形波文が連続的に貼り付けられる。いずれも茶褐色を呈し、雲母粒を含む。これらの弥生式土器を含む層より欠損するが現存長29cm、巾10.2cm、厚さ1cmを測る板状木製品(33)の出土をみた。

第18トレンチ

本トレンチの遺物は少なく、砂層中より須恵器・土師器・瓦器片^㉓等の細片を出土させるにとどまる。

第19トレンチ

砂層中より弥生式土器・須恵器・土師器・瓦(28~32)・羽釜・陶器・軽石等の出土をみるが、いずれも細片にとどまる。本トレンチから最も多くの瓦片が出土したことが特徴的であるが、いずれも磨滅が著じるしい。平面凸面の文様には縄目叩き・平行線叩き・平行線+斜交子叩きの三種がみられ、凹面の布目痕は8本/cm程度前後のものが多く。

第20トレンチ

弥生式土器・土師器・須恵器片等の出土みたが、いずれも細片にとどまる。この他復元径約30cmを測る性格不明の土器^㉔もみられる。弥生式土器は甕⁽⁴⁾及び鉢⁽⁵⁾の底部で後期のものである。

第21トレンチ

土師器・平瓦・丸瓦・瓦器碗等の細片が出土するにとどまる。

出土遺物観察一覧表

第2トレンチ 土師器

類	pit 寛	pit 寛	No. 4 寛	円形落ち込み 寛
法 量 (cm)	復元口径 12.0 器 高 不明	復元口径 12.4 器 高 不明	復元口径 13.6 器 高 不明	復元口径 13.6 器 高 不明
土 器 号	6	7	8	9
口 縁 部	短く外反する口縁部を有し、端部が内側に肥厚する。 内、外面は横ナデ	短く外反する口縁部を有し、端部が内側に肥厚する。 内、外面は横ナデ	短く外反する口縁部、端部が内側に肥厚する。 内、外面は横ナデ	短く外反する口縁部、端部が内側に肥厚する。 内、外面は横ナデ
体 部	肩部内面は横方向にヘラで削り、器壁を薄く仕上げる。	肩部内面は横方向にヘラで削り、器壁を薄く仕上げる。	肩部内面は横方向にナデ、その下方は横方向（左→右）のヘラケズリ。 外面はヨコハケ調整。肩部に記号があり、ハケ目と同じ原体で斜目上下に二箇所刺突している。	肩部内面はヘラケズリ
底 部				
色 調	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰赤褐色
胎 土 ・ 質	胎土は良好で細砂を含む微量ではあるが雲母を含む	胎土に粗砂を含む	胎土は良好で細砂を含む	胎土は良好で白砂まばらに含む
備 考	肩部より下は欠損、口縁部と肩部外面に煤付着	肩部より下は欠損、全体に剝落 遺存状況不良 9.5×4cm 片	口縁部と肩部外面に煤付着	肩部より下は欠損、遺存状況不良 5×4cm 片

第2トレンチ 土師器

類	黒褐色土 壺	黒褐色土 壺	黒褐色土 埴	
法 定 寸 法 (cm)	復元口径 22.4 器 高 不明	復元口径 18.0 復元器高 27.3	口 径 不明 現 高 5.0	
土 器 番 号	10	11	12	
口 縁 部	まっすぐ外上方へ開く口 頸部で端部は丸くおわ る。 内、外面とも右下→左上 方向の斜目のハケ目を施 した後、ヨコナデ調整。	外反する頸部は、途中で 外側にかすかな稜をつく り、内側に狭い稜をなし て、二段に外反する。端 部は欠損する。	不明	
体 部		球形に近い胴部 外面はタテハケ仕上げで あるが、調整痕は顕著で ない、内面は上部に輪積 みの痕跡があり、ナデる ぐらいの浅いヘラケズリ が上下方向に施されてい る肩部以下煤付着。	体高よりやや上位に最大 径がある扁球形の体部。 外面は剝離著しく調整不 明、くびれ部は、コナ デ。 体部最大径の位置に4.0 ×5.8cm大の黒斑があ る。 内面はくびれ部を指オサ エ、それ以下をヨコ方向 のヘラケズリ。	
底 部		丸底	丸底	
色 調	灰茶褐色	灰褐色	淡灰褐色	
胎 土 質	胎土精良	大粒の砂粒を含む	胎土良、細砂を含む	
備 考		体部が欠損	口縁部欠損	

第2トレンチ 土師器

類	pit 高杯	pit 高杯	pit 高杯	pit 高杯
法 具 器	復元口径 15.0 器 高 不明 底 径 不明	復元口径 13.0 現 高 9.0 底 径 不明	復元口径 16.0 器 高 不明 底 径 不明	口 径 不明 脚 高 8.2 底 径 11.2
土 器 番 号	13	14	16	15
杯 部	ゆるく上方へ広がる杯部、端部で少し外反し、丸くおわる。 外面は、中央より放射線の荒いハケ目をつけ、その上を横ナデ（右まわり） 内面ヨコナデ	水平方向にのびる杯底部より、ゆるやかに外反する口縁部がつく。端部は丸い 口縁部は内、外面を横になでている。 底部外面は筥で削っている。（上→下）	水平方向にのびる杯底部より、ゆるやかに外反する口縁部がつく。 内、外面を横になで、口縁外面に指の圧度があり、中央より底部にかけてタテハケが施されている。	不明
脚 部	接合部に締さし置が残る。杯部と接合したあと、内側をヘラケズリして調整。 脚柱から下部欠損	杯部と脚部の接合部は挿入式である。 脚部は柱状部が下方へ次第に太くよっている。 外面はタテ方向のヘラケズリ、内面はしぼりのあとを横方向になでている。 裾部欠損	不明	柱状部でゆるく拡がり、裾部は脚高 $\frac{1}{2}$ 下方でラッパ状に広がる。 柱状部下方に三孔を外から穿つ。 内面は柱状部をしぼめたあとをていねいに横にヘラ削りして調整している。 裾部はヨコハケ。 外面は柱状部がタテ方向のヘラミガキ、裾部はヨ
底 部				
色 調	灰茶褐色	暗茶褐色	外面…黒褐色 内面…灰褐色	淡灰褐色
胎 土 質	胎土精良、堅い 金雲母を微量含む	胎土精良 焼成良好	胎土精良 焼成良好	胎土精良 細砂を含むが堅い
備 考				

第2トレンチ 土師器

類	円形落ち込み 高杯	円形落ち込み 高杯	流入砂層 高杯	流入砂層 高杯
法 英 ③	復元口径 18.2 器 高 不明 底 径	復元口径 24.6 器 高 14.4 底 径 14.0	復元口径 24.0 器 高 不明 底 径 不明	復元口径 16.0 器 高 不明 底 径 不明
土 器 号	17	18	19	20
杯 部	やや内弯気味の底部より、ゆるやかに外反する口縁につき、端部は丸く、外面にかすかな凹線が一本ついている。 外面はタテハケを間隔をもって施し、後に横ナデ（横篋磨き状）している。内面は口縁部が細かい横篋磨きで、その下方はかすかな斜刷毛が施されている。	平たく外方へ拡がり、急に外上方へ口縁部が弧がる。底部と口縁部の接合部は外側に鋭い稜がつく。 外面はタテハケ調整、内面はナデ調整。 杯部の内外面に11cm円状の黒斑あり。	内が深く、内面はヘラミガキによって、平滑に調整。外面は指ナデ調整。底部はヘラケズリ、口縁部はヨコナデ。 底部欠損	内弯する杯部、上端は丸くおわる。外面は指ナデ調整内面はヘラミガキにより平滑に調整。 底部欠損
脚 部	不明	柱状部でゆるく拡がり、裾部はラッパ状に拡がる。柱状部下方に三孔あり。外面はタテハケ調整裾部はナデ。 内面は剝離著しく不明であるが、裾部に指圧痕が残る。外面に4×5cm大の黒斑。	不明	不明
底 部				
色 調	灰黄褐色	灰褐色	赤茶褐色	赤茶褐色
胎 土 質	細砂を含む胎土 焼成良好	胎土精良 焼成良好	焼成良好 1mm程度の砂粒を含む胎土	胎土精良 焼成良好
備 考	底部から脚部欠損 8×9cm 片	復元完形		

第2トレンチ 土師器

弥生式土器

類	流入層 高坏	類	青灰色土 鉢	青灰色土 壺	流入砂層 壺
法 規 (ϕ)	復元口径 14.0 器 高 不明 底 径 不明	法 規 (ϕ)	口 径 25.3 器 高 14.8	復元口径 22.0 器 高 不明	復元口径 20.0 器 高 不明
土 器 番 号	21	土 器 番 号	3	2	1
坏 部	口縁部上方で内湾する。 外面指ナデ調整。 底部欠損	口 縁 部	外反する口縁部端部は 上下に少し拡張する。 内外面ともヨコナデ調 整。	外反し、端部で上下に 拡張する。 内面上端部に円形浮文 がつく。口縁外面は波 状文、頸部はタテハケ 調整、内面はナデ調整 で指圧痕が残る。	外反し、端部で下方に 拡張する。 口縁部外面は筋描き縞 状文が施される。
脚 部	不明	体 部	内、外面ともいねい なヨコ方向のヘラミガ キ。	不明	不明
底 部		底 部	平底	不明	不明
色 調	赤褐色	色 調	茶褐色	濃茶褐色	暗褐色
胎 土 質	微砂を含む 焼成良好	胎 土 質	胎土精良 黒雲母を含む	雲母、白色砂粒を含む 焼成良好	雲母を含む 焼成良好
備 考		備 考	復元完形		

類	砂層 塊	甕	鉢 or 壺	
法 英 (cm)	復元口径 16.0 器 高 不明	口 径 不明 器 高 不明	口 径 不明 器 高 不明	
土 器 番 号	23	4	5	24
口 縁 部	ヨコナド調整	不明	不明	
体 部	外面指押さえの痕跡が残る。内面は平行暗文が施され、見込み部分は格子状の暗文。	外面はかすかに左傾の粗いタタキ目が施される。	外面にかすかにタタキ目の痕跡が残る。	外面は格子目状のタタキが施され、内面はヨコナド調整。
底 部	不明	中央が凹み気味の平底	指でつまんで調整した、外反気味のあげ底。外面半分に黒斑	
色 調	外面…白灰色 内面…灰黒色	外面…灰褐色 内面…灰黒色	黄褐色	淡褐色
胎 土 質	胎土精良 焼成良好	白色砂粒を多く含む 微細黒雲母を含む	黒雲母を含む 焼成良好	大粒の白色砂粒を多く含む、金雲母を少し含む
備 考				

木 器

地出 点土	第2トレンチ 青灰色土			
法 量	原寸長 29.0 幅 10.2 厚 さ 1.0			
番 号 版	33			
特 徴	表面を両面とも、木目と交差する方向に削っている。長辺は両面ともほぼ垂直に削り、短辺は斜目に細かく削っている。長辺の一方を両面より削って薄くしている。 現存部の形状から判断する限り、鉾、鋸ではないと思われる。			
色 調	茶 褐 色			
質	カシと思われる。			
備 考				

第4章 まとめ

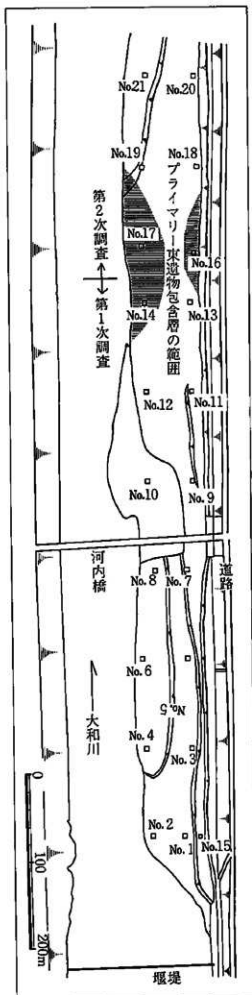
今回の調査でプライマリーな包含層の遺存が確認されたのは第16, 17トレンチである。

第16トレンチは、トレンチ内で顕著な包含層は認められなかったものの、第1次調査の際、船橋遺跡が北方の堤防外にも広がっていると結論されていると同様に堤防外に連続するものであろう。

第17トレンチの包含層は第1次調査の第14トレンチで認められた包含層群と連続するもので、第19トレンチまではおよばないことが確認しうる。

第16, 17トレンチの状況から、かつて川のおそらく分流が第16, 17トレンチの間を流れ第19トレンチの附近で再び本流と合流していたと考えられる。従って第14, 17トレンチの遺物包含層群、遺構は中洲状になって、水流の浸食による流出をまぬがれたのであろう。現在高水敷をなしている所を分流が流れたのが事実であるなら、第18, 21トレンチの青灰色粘土の深度のレベルから、現地表下約2～260m、T.P. 13m ぐらいまでの土層を流し去ったものと思われる。

さて今回の調査の主たる目的である船橋遺跡の西限であるが、今回の調査による限り第17と第19トレンチの附近がプライマリーな遺物包含層の西限である。ただ第1次調査の報

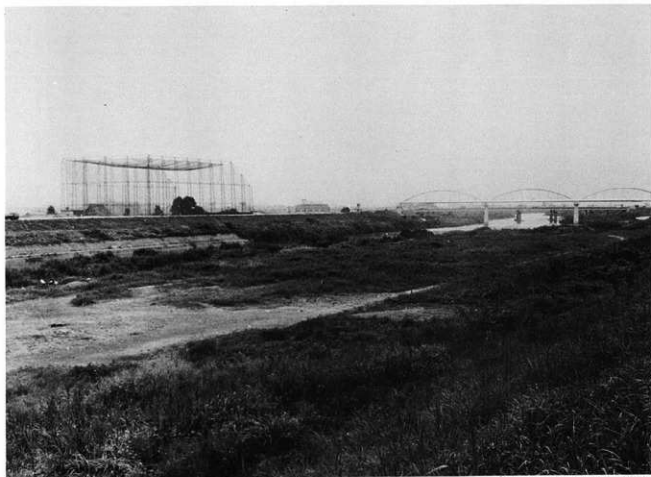


挿図1 トレンチ位置図

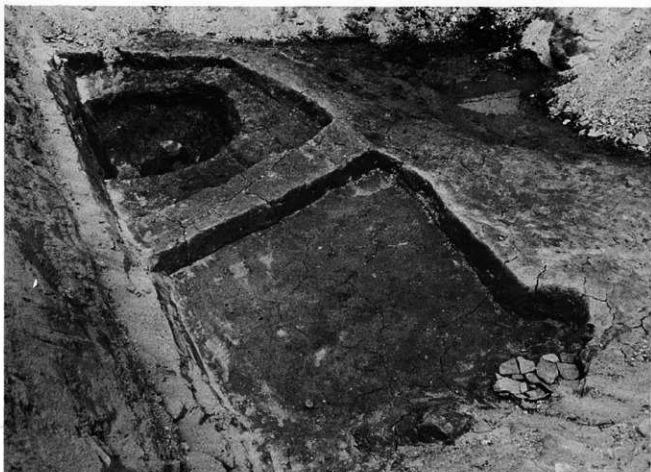
告でも記したとおり、2次堆積という理由で不必要な遺物とみなすことは困難である。又最近工事が実施された河内橋より km下流の水管橋の工事現場より、古墳時代遺物の出土が知られており、むろんこれは船橋遺跡と異なる遺跡であろうが、船橋遺跡とすぐ隣接した遺跡の存在が明らかになった点において注目される。



河内橋より西を望む



右岸堤防上より西を望む



東より望む



西より望む



第17トレンチ布留式土器出土状態



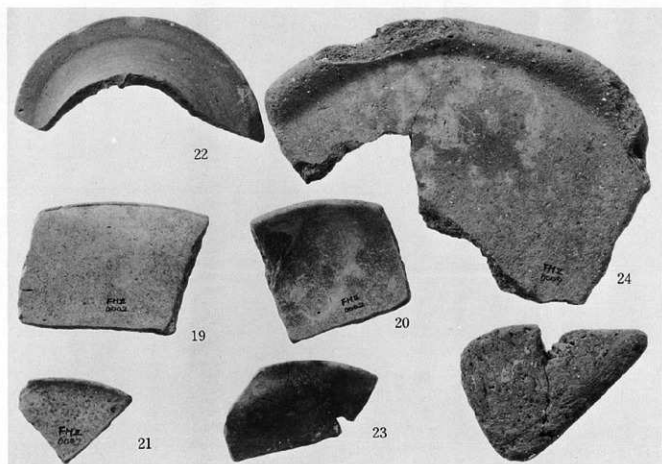
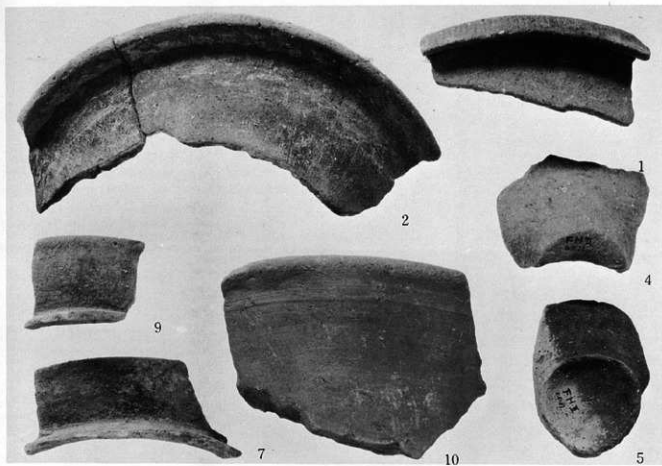
第17トレンチ弥生式土器出土状態



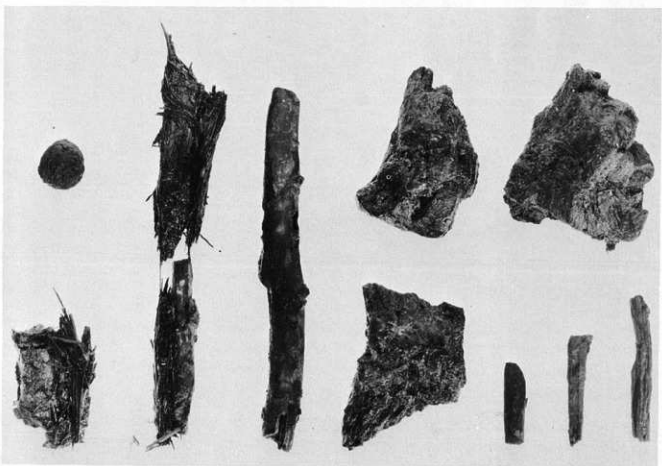
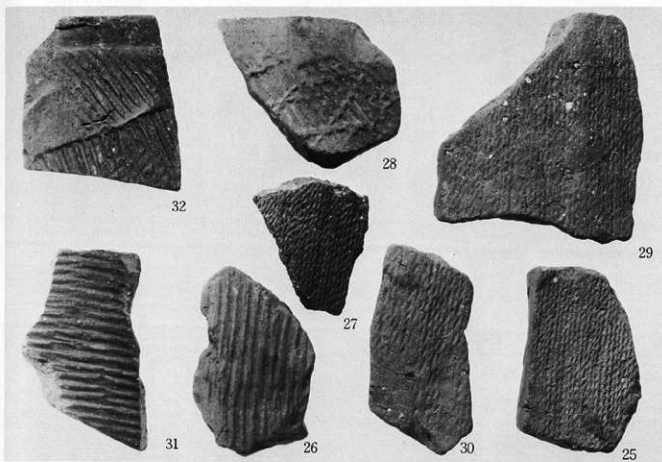
第16トレンチ



第20トレンチ

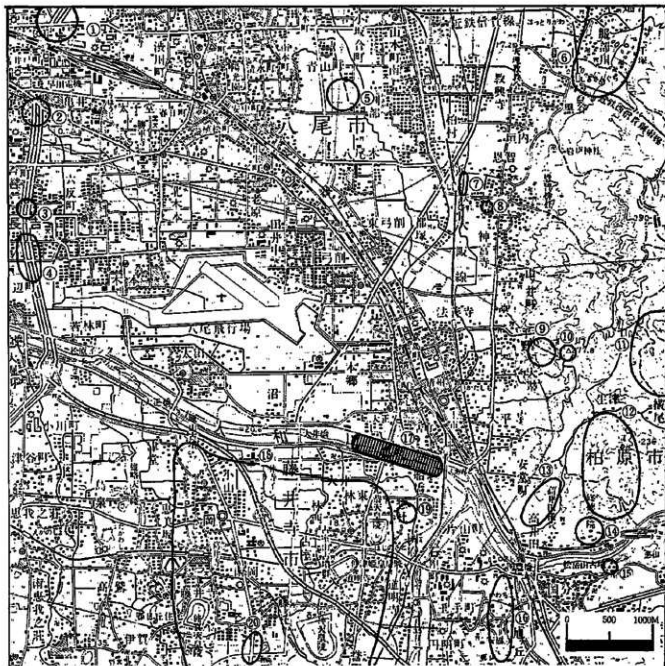






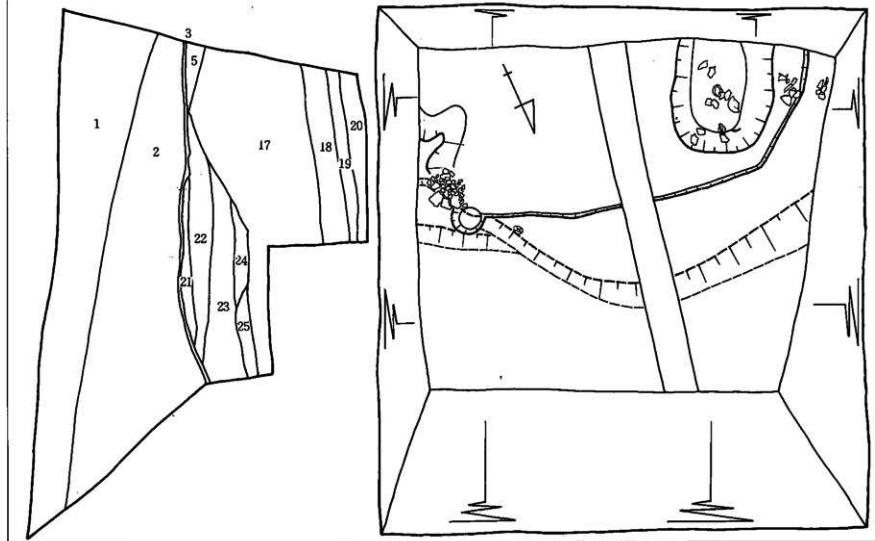
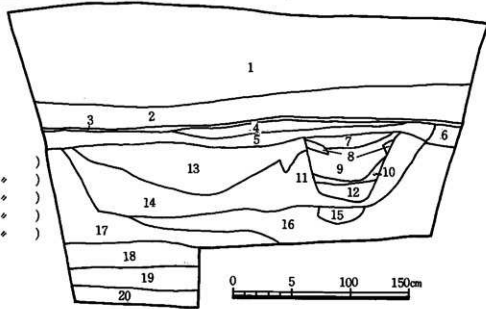
第2トレンチ、ビット内出土、自然遺物

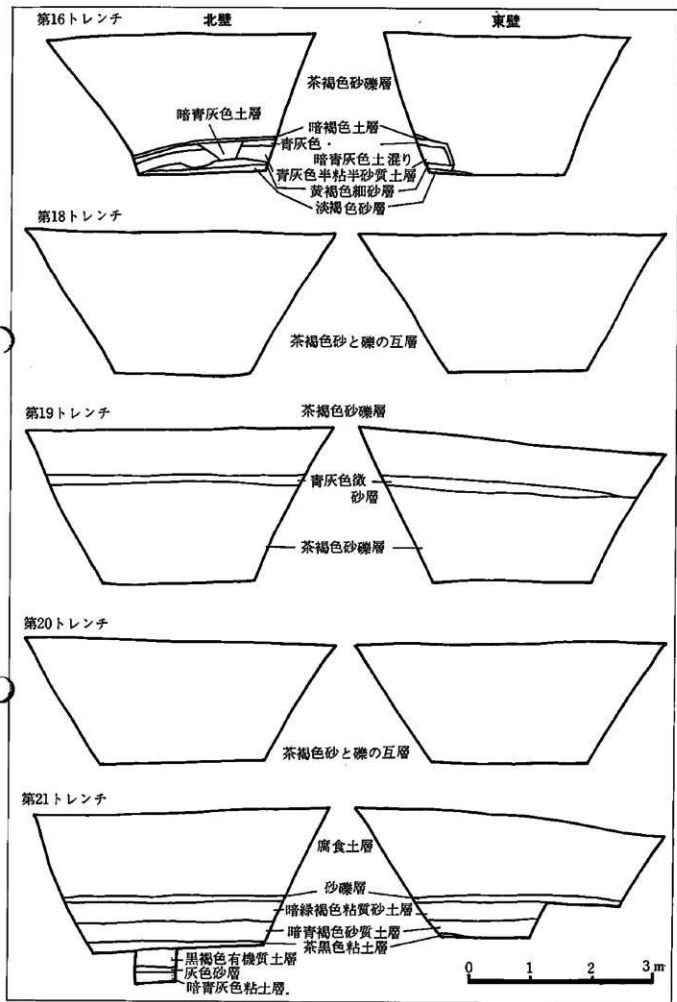
図版一 船橋遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

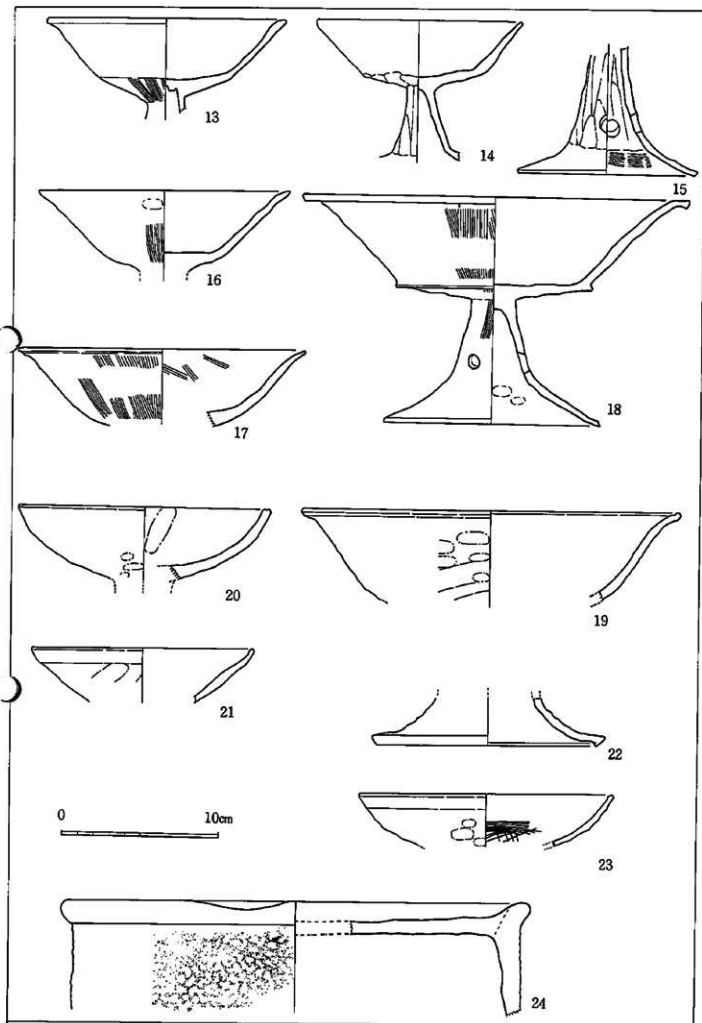


- | | |
|-------------|-------------|
| 1. 久宝寺遺跡 | 11. 雁多尾畑古墳群 |
| 2. 亀井山遺跡 | 12. 平尾山古墳群 |
| 3. 長原遺跡 | 13. 安堂古墳群 |
| 4. 中田遺跡 | 14. 高井田横穴 |
| 5. 高安千塚 | 15. 松岳山古墳 |
| 6. 恩智川遺跡 | 16. 玉手山古墳群 |
| 7. 恩智弥生時代遺跡 | 17. 船橋遺跡 |
| 8. 平野古墳群 | 18. 古市古墳群 |
| 9. 高尾山遺跡 | 19. 国府遺跡 |
| 10. 高尾山遺跡 | 20. はさみ山遺跡 |

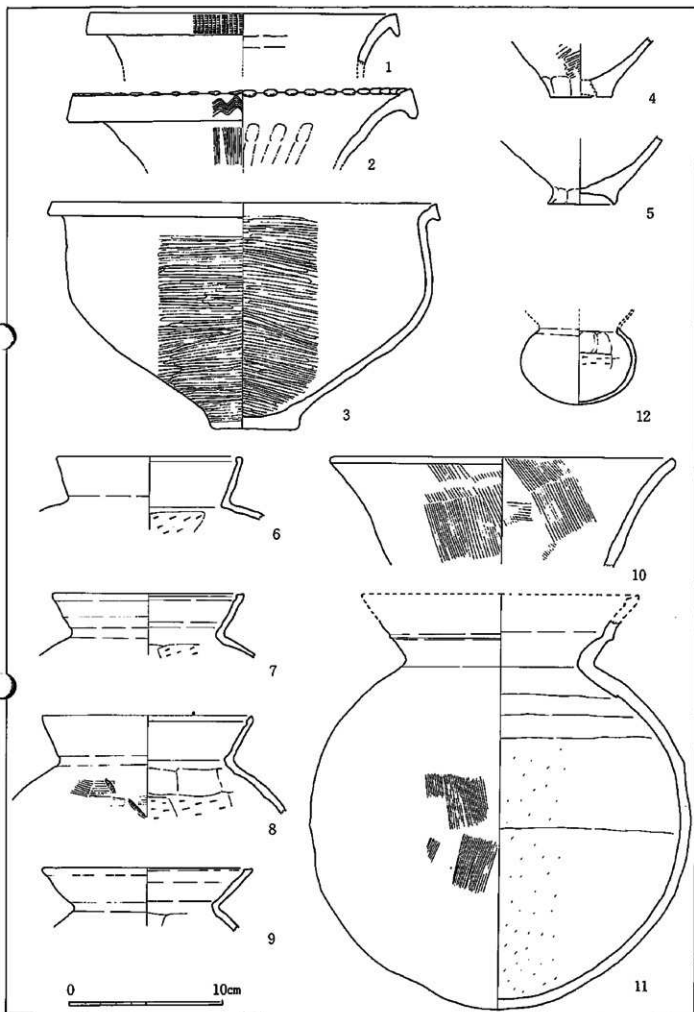
- | | |
|--------------------|----------------|
| 1.砂礫層 | 13.灰褐色砂質土 |
| 2.黄褐色混礫砂層 | 14.灰褐色砂質土 |
| 3.黄褐色粘土層 | 15.青灰色粘土 |
| 4.灰褐色粘質土層 | 16.青灰色微砂層 |
| 5.青茶褐色粘質土層(遺物包含層) | 17.青灰色粘質砂層 |
| 6.暗青灰色粘土層 (◇) | 18.青灰色砂質砂層 |
| 7.暗青茶色粘質土 (◇) | 19.黒色粘質砂層 |
| 8.13の土層の落ち込み | 20.青灰色粗砂層 |
| 9.炭・灰の堆積層 (◇) | 21.暗青灰色粘質土層(◇) |
| 10.灰褐色砂質粘土(炭化物を含む) | 22.暗茶褐色粘質土 (◇) |
| 11.植物遺体・炭の堆積層 | 23.黒褐色粘質土層 (◇) |
| 12.灰褐色砂質粘土(遺物包含層) | 24.茶黒色粘質砂土層(◇) |
| | 25.黄褐色粗砂層 (◇) |



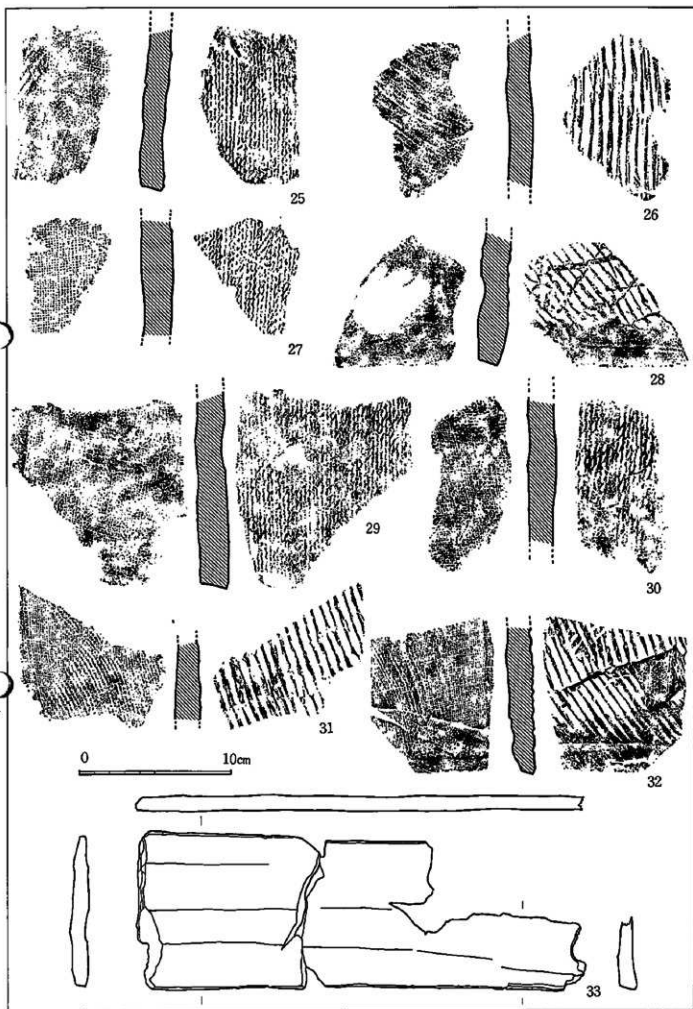




13~21(17トレンチ出土) 22(19トレンチ出土) 23(18トレンチ出土) 24(21トレンチ出土)



1.2.6~11(17トレンチ出土) 4.5(3トレンチ出土)



25.26(16トレンチ出土) 27(17トレンチ出土) 28~32(19トレンチ出土) 33(17トレンチ出土)